

乳幼児と動物飼育活動

— 岩手の幼稚園・保育園の実態調査 (続報3:「生, 死」への対応) —

鎌田 文 聰*

(2000年9月27日受理)

はじめに

「動植物飼育・栽培活動」や「動植物との触れ合い活動」が子どもにとって良かった(有効)点として、概略、以下の五点がこれまでの研究(鎌田:1999, 鎌田:2000)から示唆されてきた。

①「自然や生き物や植物に直接触れることができ、極く自然にそれらに対するの興味や関心が培われる」という点が、「動物飼育活動」では100%の園で、「植物栽培活動」では96.6%の園であげられた。

このことは、「極く自然にそれらに対するの興味や関心が培われる」ことがあってこそはじめて、その後の対応の仕方や感じ方や考え方、さらには、そのあり方が形成されていくものであることを示している点で、その意義は極めて大きい。

②「優しさや思いやりが育つ」という点は、「動物飼育活動」では94.5%の園で、また「植物栽培活動」では64.7%の園であげられた。

注目すべきことは「動物飼育活動」が「植物栽培活動」よりも3割ほどもより高いことであり、今後の取り組みに際して、考慮すべき重要な点である。

③「生死や成長や生態を理解できる」という点は、「動物飼育活動」で88.0%、「植物栽培活動」では62.9%の園であげられた。生命の大切さを感じ得る基礎としての就学前教育にとって、如何に大切な活動であるかを示している。特にも「動物飼育活動」が「植物栽培活動」よりも2.5割ほどもより高い割合を示していたことの意味は、改めて、「植物栽培活動」はもとより、「動物飼育活動」も今後の取り組みに際して、重視すべき重要な活動であることを示唆している。

④「子ども同士の仲間関係にも好影響をもたらす」という点は、「動物飼育活動」で43.6%、「植物栽培活動」では37.9%の園であげられるにとどまっていた。どちらにおいても40%前後とそれ程多いとはいえない。しかし、どちらがより「仲間関係にも好影響をもたらす」活動になっているのかを見ると、園の種別を越えて前者の「動物飼育活動」であることが示唆されている。このことの示している意味を軽視することはできない。

⑤「表現活動につながる」、「職員や保育内容にも好影響」、「科学的な態度や力が育つ」と

* 岩手大学教育学部

いったことも「園として動物や植物を飼育したり栽培する活動を実施して良かった点として、園種別を越えて共通的に挙げられた。「植物栽培活動」の方が「動物飼育活動」よりも5~10%前後も高い。とりわけ、「科学的な態度や力が育つ」では、「植物栽培活動」で29.0%、「動物飼育活動」で24.7%の園であげられているにとどまっていたが、後者よりも4.3%程ではあるが前者の「植物栽培活動」の方が高い。

このことの示している意味も軽視することはできない。

上記のように「動物飼育活動」や「植物栽培活動」が乳幼児期にある子どもにとっての有効性が明らかにされてきた。が、そうした活動の中で特に、子どもへの心理的影響が大きいと考えられる動物の「生まれたとき」および「死んだとき」に際しての、よりよい在り方としての活動の検討が課題であることも示唆されてきた。

1 本研究の目的

保育園や幼稚園や託児室における「動物飼育活動」や「動物との触れ合い」に関するこれまでの研究を踏まえ、本研究では以下の二点について検討することを目的とする。

- 1 子どもへの心理的影響が大きいと考えられる動物の「生まれたとき」および「死んだとき」に際し、各園種でどのような対応をしているのかに焦点をあて、それぞれの場の個性や共通性に関する実情の一端を分析、検討すること。
- 2 それらの対応と「優しさや思いやりを育てる」との相互的な関連の程度についての実情の一端を分析、検討することを通し、動物の「生まれたとき」および「死んだとき」に際してのよりよい在り方としての活動を検討すること。

2 研究方法

1998（平成11）年10月から11月末まで、岩手県内にある認可・無認可保育園、託児所や幼稚園（季節により休園中またはすでに休園となっている園は含まれていない）のすべての園を対象に、以下の六点到焦点をあてた26項目のアンケート調査を郵送方式で実施する。

1. 園の規模、障害児や障害の疑いのあるこどもの入園状況
2. 園のある地域の自然環境（1988（平成1）年と1998（平成10）年の変化）
3. 飼育・栽培している動植物の種類と数
4. 子どもと動植物との関わりせ方（毎日の世話や、動植物の誕生、芽が出たときまた、死や枯れたことを経験したとき等）
5. 園として飼育・栽培活動へのとらえかた（よかったこと、研修の機会等）
6. 飼育・栽培活動における悩みや困難

3 結果と考察

(1) アンケート調査を依頼した岩手県内の保育園・幼稚園

アンケート調査対象園は、岩手県内にある国公市町村、私立また認可、無認可を問わず、全ての保育園や幼稚園である。大別すると、保育園444園、幼稚園130園、合計574園であった。

認可・公立保育園が178園と最も多く、ついで認可・私立保育園が155園であり、認可・公立幼稚園68園、認可・私立幼稚園62園と、認可が無認可の保育園111園の4倍以上であった。

(2) 回答を頂いた岩手県内の保育園・幼稚園数

有効回答を得た岩手県内の幼稚園(96園:73.3%)と保育園(302園:61.2%)は全体で391の園であり、ほぼ7割弱に当たる。認可・公立保育園からは、172園(96.6%)と最も多く、ついで認可・私立保育園の99園(63.9%)から、さらに認可・公立幼稚園からは58園(85.3%)、認可・私立幼稚園の38園(61.3%)、無認可・私立保育園の31園(27.9%)からも回答を得た。

(3) 幼稚園・保育園の園種別ごとの動物飼育活動の「生、死」に対する対応

(A) 各園での個別性 (以降の各園種別の図を参照のこと)

1 国公立幼稚園

1) 「動物の子どもが生まれたときの対応」について

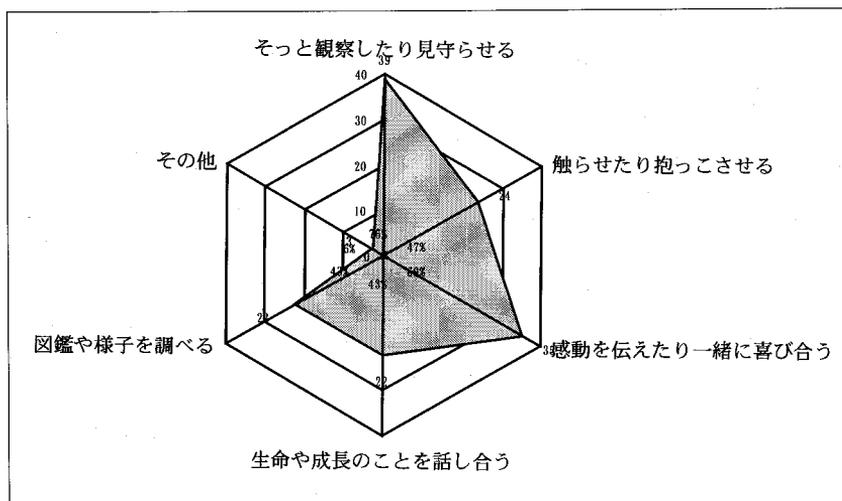


Fig. 1 動物の子どもが生まれたときの対応 (国公立幼稚園; 51園)

「動物の子どもが生まれたときの対応」として、国公立幼稚園で最も高い割合で挙げられたのは、「そっと観察したり見守らせる」(76%)であり、ほぼ4分の3の園であった。ついで二番目に高い割合で挙げられたのは、「感動を伝えたり一緒に喜び合う」(69%)でありほぼ7割の園であった。さらに三番目に高い割合で挙げられたのは、「触らせたり抱っこさせたりする」(47%)、四番目に高い割合で挙げられたのは、「生命や成長のことを話し合う」(43%)、「図鑑や様子を調べる」(43%)と、いずれも、4割台と半数以下の園で挙げられている程度であった。

2) 「飼育している動物が死んだときの対応」について

「飼育している動物が死んだときの対応」として、国公立幼稚園で最も高い割合で挙げられた

のは、「職員と子どもとで一緒に埋める」(94%)、ほぼ9.5割もの園であった。ついで二番目に高い割合で挙げられたのは、「墓を作ったり、花や線香で弔う」(78%)、ほぼ8割の園であった。ついで三番目に高い割合で挙げられたのは、「死んだ原因について話し合う」(75%)とほぼ4分の3の園であり、四番目に高い割合で挙げられたのは、「生死について話し合う」(61%)、ほぼ6割の園で挙げられていた。「天国のことなどについて話し合う」(41%)が、4割台であった以外は、6割から9割以上の園で挙げられているなど、多くの園でかなり重視した取り組みがなされていることが示されている。

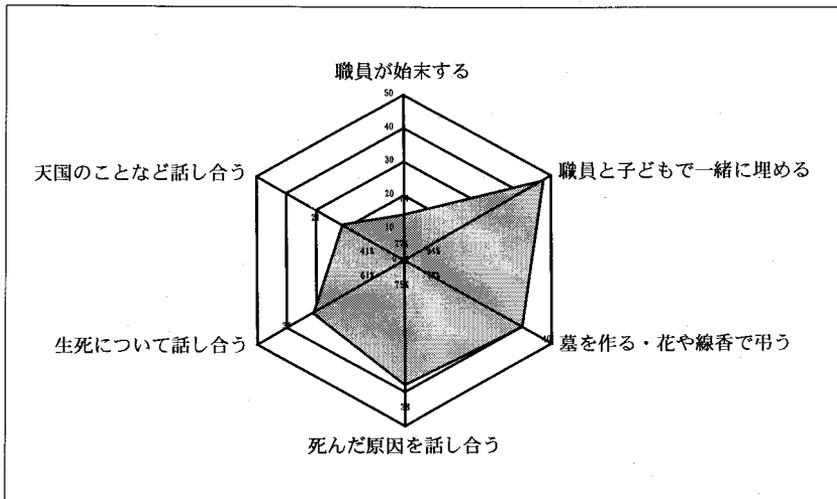


Fig. 2 飼育している動物が死んだ時の対応 (国公立幼稚園; 51園)

「生、死」への対応としての上述のことからも伺えるように、国公立幼稚園に於いては、全般的に「動物の子どもが生まれたとき」の対応も、一定程度大切にしていた取り組みをしているが、「飼育している動物が死んだとき」の対応の方を、より多くの園で重視していることが伺える。

幼児期に、こうした「動物が死んだときの対応」を如何に経験するかが、「共生」を重視したその後の「心の成長・発達」にとっての重要な礎になるものといえよう。

2 私立幼稚園

1) 「動物の子どもが生まれたときの対応」について

「動物の子どもが生まれたときの対応」として、私立幼稚園で最も高い割合で挙げられたのは、「そっと観察したり見守らせる」(84%)であり、ほぼ5分の4強の園であった。同様に高い割合で挙げられたのは、「図鑑や様子を調べる」(81%)でありほぼ8割の園であった。

特にも「図鑑や様子を調べる」なども、国公立幼稚園よりも約4割弱も高く、かなり重視していることが伺え、極めて興味深い結果を示している。

三番目に高い割合で挙げられたのは、「感動を伝えたり一緒に喜び合う」(74%)ということであり、四番目に高い割合で挙げられたのは、「生命や成長のことを話し合う」(45%)、「触らせたり抱っこさせたりする」(29%)であった。

「触らせたり抱っこさせたりする」(29%)が、国公立幼稚園よりも18%も少ない結果が示さ

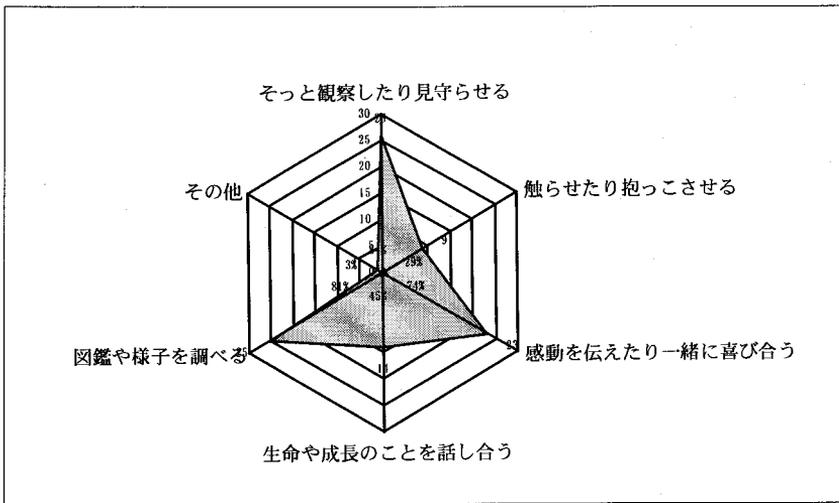


Fig. 3 動物の子どもが生まれた時の対応 (私立幼稚園 ; 31 園)

れた。

2) 「飼育している動物が死んだときの対応」について

「飼育している動物が死んだときの対応」として、私立幼稚園で最も高い割合で挙げられたのは、「職員と子どもと一緒に埋める」(94%)であり、ほぼ9.5割もの園であり、ついで二番目に高い割合で挙げられたのは、「墓を作ったり、花や線香で弔う」(58%)でありほぼ6割の

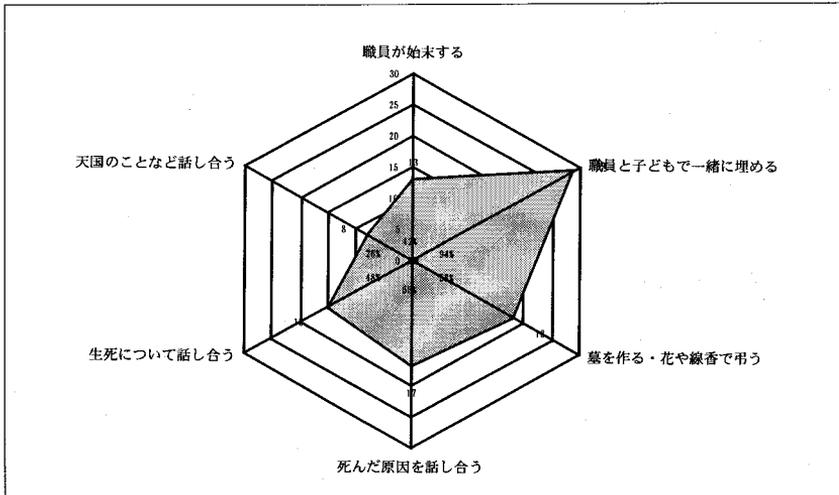


Fig. 4 飼育している動物が死んだ時の対応 (私立幼稚園 ; 31 園)

園であった。三番目に高い割合で挙げられたのは、「死んだ原因について話し合う」(55%)とほぼ2分の1強の園であり、四番目に高い割合で挙げられたのは、「生死について話し合う」(48%)、「天国のことなどについて話し合う」(26%)ということであった。

これらのことから伺えるように、全般的に「動物の子どもが生まれたとき」の対応よりも、「飼育している動物が死んだときの対応」の方がより多くの園で「職員と一緒に」とりくみが重視されている。幼児期にこうした「動物が死んだときの対応」を如何に経験するかが、「共生」を重視したその後の「心の成長・発達」にとって極めて重要であると考えられる。

3 認可公立保育園

1) 「動物の子どもが生まれたときの対応」について

「動物の子どもが生まれたときの対応」として、認可公立保育園で最も高い割合で挙げられたのは、「そっと観察したり見守らせる」(64%)であり、ほぼ5分の3の園であった。二番目に高い割合で挙げられたのは、「感動を伝えたり一緒に喜び合う」(59%)であった。三番目に高

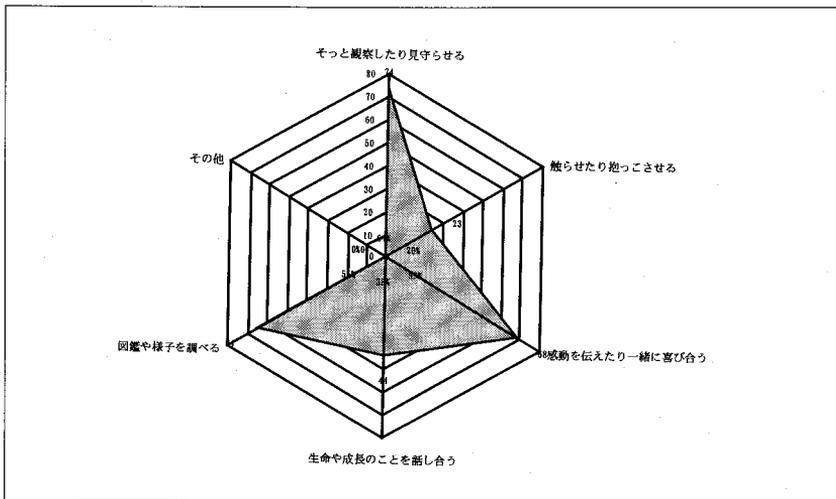


Fig. 5 動物の子どもが生まれた時の対応 (認可公立保育園; 116園)

い割合で挙げられたのは、「図鑑や様子を調べる」(55%)であり、四番目に高い割合で挙げられたのは、「生命や成長のことを話し合う」(38%)であり、「触らせたり抱っこさせたりする」は20%と、2割の園のみであり、幼稚園とは異なった対応であることが示された。

2) 「飼育している動物が死んだときの対応」について

「飼育している動物が死んだときの対応」として、認可公立保育園で最も高い割合で挙げられたのは、「職員と子どもと一緒に埋める」(99%)であり、ほぼ10割の園であった。次に高い割合で挙げられたのは、「死んだ原因について話し合う」(66%)とほぼ5分の3強の園であった。三番目に高い割合で挙げられたのは、「墓を作ったり、花や線香で弔う」(59%)であり、ほぼ6割の園で、「また、四番目に高い割合で挙げられたのは、「生死について話し合う」(44%)、「天国のことなどについて話し合う」(19%)ということであった。

これらのことから伺えるように、全般的に「動物の子どもが生まれたとき」の対応よりも、「飼育している動物が死んだときの対応」の方がより多くの園で重視されている。幼児期にこうした「動物が死んだときの対応」を如何に経験するかが、「共生」を重視したその後の「心の成

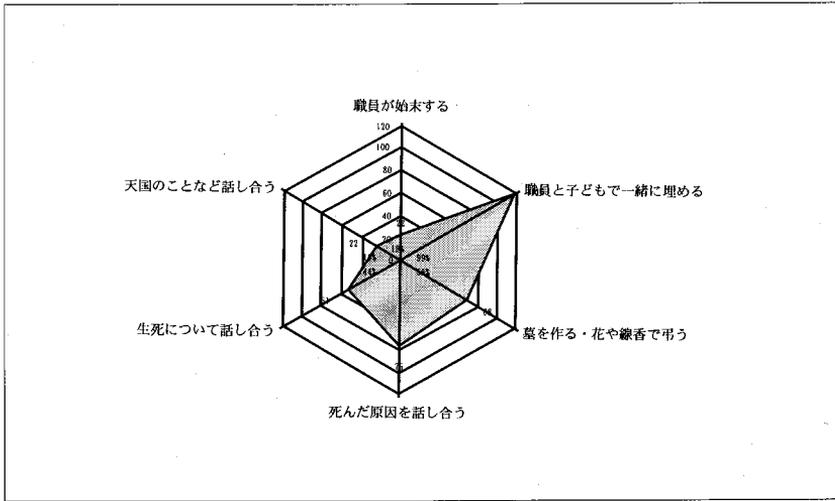


Fig. 6 飼育している動物が死んだ時の対応 (認可公立保育園; 116園)

長・発達」にとって極めて重要である。

4 認可私立保育園

1) 「動物の子どもが生まれたときの対応」について

「動物の子どもが生まれたときの対応」として、認可私立保育園で最も高い割合で挙げられたのは、「そっと観察したり見守らせる」(69%)であり、ほぼ7割りの園であった。次に高い割合で挙げられたのは、「感動を伝えたり一緒に喜び合う」(53%)でありほぼ5割強の園であった。三番目に高い割合で挙げられたのは、「生命や成長のことを話し合う」(45%)、「図鑑や様子を調べる」(45%)であり、ついで、「触らせたり抱っこさせたりする」は、21%と、2割程度の園にとどまっていた。

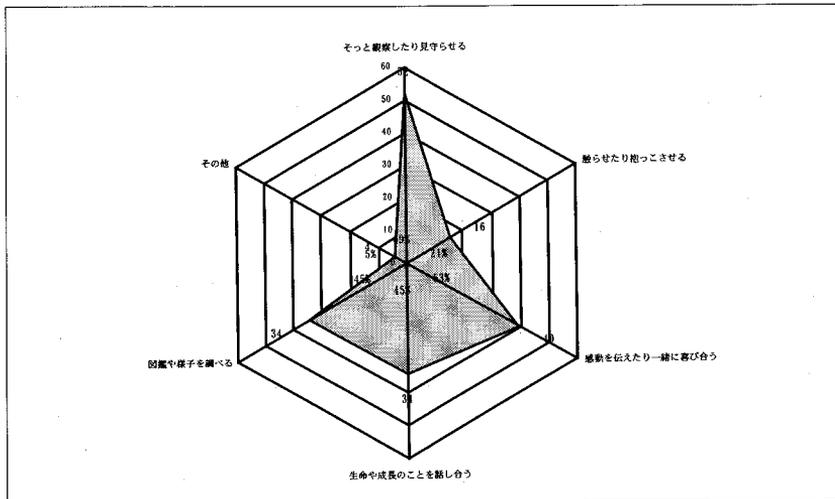


Fig. 7 動物の子どもが生まれたときの対応 (認可私立保育園; 75園)

2) 「飼育している動物が死んだときの対応」について

「飼育している動物が死んだときの対応」として、認可私立保育園で最も高い割合で挙げられたのは、「職員と子どもと一緒に埋める」(92%)であり、ほぼ9割強の園であり、二番目に高い割合で挙げられたのは、「墓を作ったり、花や線香で弔う」(63%)でありほぼ6割強の園

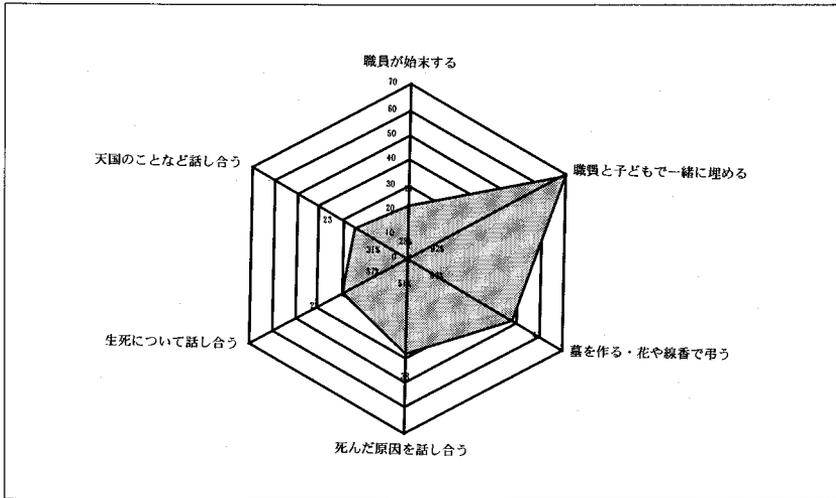


Fig. 8 飼育している動物が死んだ時の対応 (認可私立保育園; 75 園)

であった。三番目に高い割合で挙げられたのは、「死んだ原因について話し合う」(51%)とほぼ2分の1の園であった。また、四番目に高い割合で挙げられたのは、「生死について話し合う」(37%)、また、「天国のことなどについて話し合う」は、31%であった。

これらのことから伺えるように、全般的に「動物の子どもが生まれたときの対応」よりも、「飼育している動物が死んだときの対応」の方がより多くの園で重視されている。幼児期にこうした「動物が死んだときの対応」を如何に経験するかが、「共生」を重視したその後の「心の成長・発達」にとって極めて重要であることを示している。

5 無認可保育(託児)園

1) 「動物の子どもが生まれたときの対応」について

「動物の子どもが生まれたときの対応」として、無認可保育(託児)園で最も高い割合で挙げられたのは、「そっと観察したり見守らせる」(44%)であり、ほぼ2分の1弱の園であった。ついで二番目に高い割合で挙げられたのは、「感動を伝えたり一緒に喜び合う」(33%)でありほぼ3割の園で挙げられた。三番目に高い割合で挙げられたのは、「生命や成長のことを話し合う」(28%)であり、ついで、「触らせたり抱っこさせたりする」は、22%であり、「凶鑑や様子を調べる」は、17%であった。

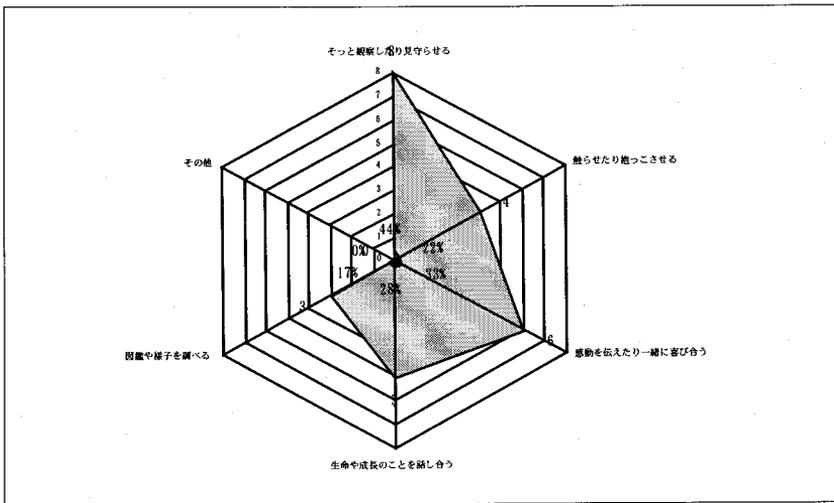


Fig. 9 動物の子どもが生まれた時の対応（無認可保育園；18園）

2) 「飼育している動物が死んだときの対応」について

「飼育している動物が死んだときの対応」として、無認可保育（託児）園で最も高い割合で挙げられたのは、「職員が始末する」（50%），二番目に高い割合で挙げられたのは、「職員と子ども

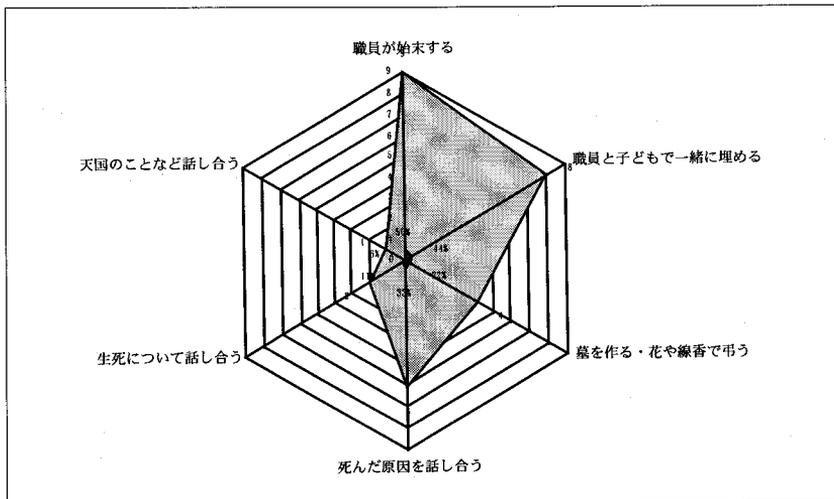


Fig. 10 飼育している動物が死んだときの対応（無認可保育園；18園）

もとで一緒に埋める」（44%）であり、ほぼ5割弱の園であり、「死んだ原因について話し合う」（33%）、「墓を作ったり、花や線香で弔う」は、22%であり、「天国のことなどについて話し合う」は僅かに6%の園であった。

これらのことから伺えるように、全般的に「動物の子どもが生まれたとき」の対応よりも、「飼育している動物が死んだときの対応」の方がより多くの園で重視されている。幼児期こうし

た「動物が死んだときの対応」を如何に経験するかが、「共生」を重視したその後の「心の成長・発達」にとって極めて重要であると考えられる。

4 各園での共通性（以降の Fig. 参照のこと）

1) 「動物の子どもが生まれたときの対応」について

「動物の子どもが生まれたときの対応」として、国公立幼稚園で最も高い割合で挙げられたのは、「そっと観察したり見守らせる」(76%)、ほぼ4分の3の園であった。ついで二番目に高い割合で挙げられたのは、「感動を伝えたり一緒に喜び合う」(69%)でありほぼ7割の園であった。

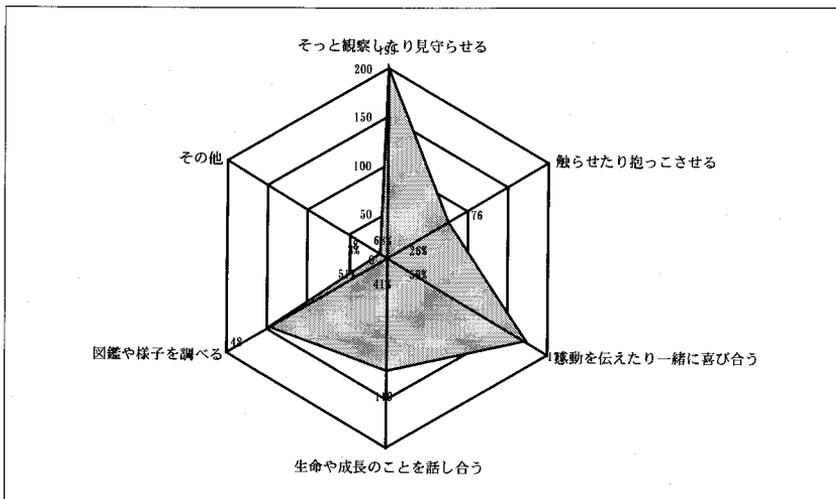


Fig. 11 動物の子どもが生まれた時の対応（全保育園&幼稚園；291園）

三番目に高い割合で挙げられたのは、「触らせたり抱っこさせたりする」(47%)ということであり、ついで、四番目に高い割合で挙げられたのは、「生命や成長のことを話し合う」(43%)、「図鑑や様子を調べる」(43%)ということであった。

2) 「飼育している動物が死んだときの対応」について

「飼育している動物が死んだときの対応」として、国公立幼稚園で最も高い割合で挙げられたのは、「職員と子どもと一緒に埋める」(94%)であり、ほぼ9.5割もの園であった。ついで二番目に高い割合で挙げられたのは、「墓を作ったり、花や線香で吊う」(78%)でありほぼ8割の園であった。三番目に高い割合で挙げられたのは、「死んだ原因について話し合う」(75%)とほぼ4分の3の園であり、また、四番目に高い割合で挙げられたのは、「生死について話し合う」(61%)、「天国のことなどについて話し合う」(41%)ということであった。

これらのことから伺えるように、全般的に「動物の子どもが生まれたとき」の対応よりも、「飼育している動物が死んだときの対応」の方がより多くの園で重視されている。幼児期こうした「動物が死んだときの対応」を如何に経験するかが、「共生」を重視したその後の「心の成

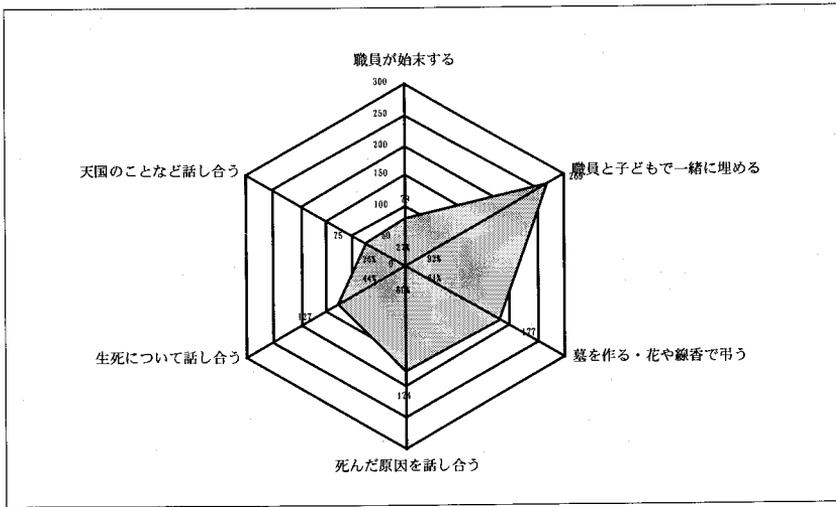


Fig. 12 飼育している動物が死んだ時の対応（全保育園&幼稚園；291園）

長・発達」にとって極めて重要であると考えられる。

(4) 幼稚園・保育園で飼育している動物の「生、死」に際しての対応と「優しさや思いやりを育てる」との相互的な関連について

1) 「動物の子どもが生まれたときの対応」について

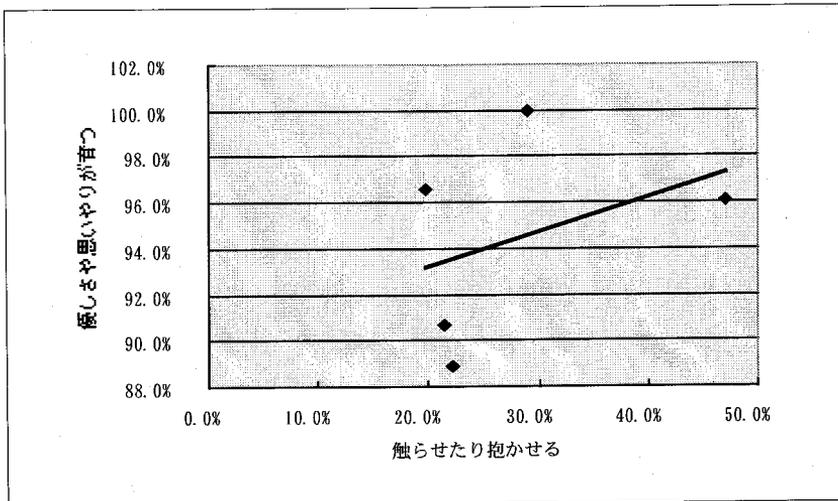
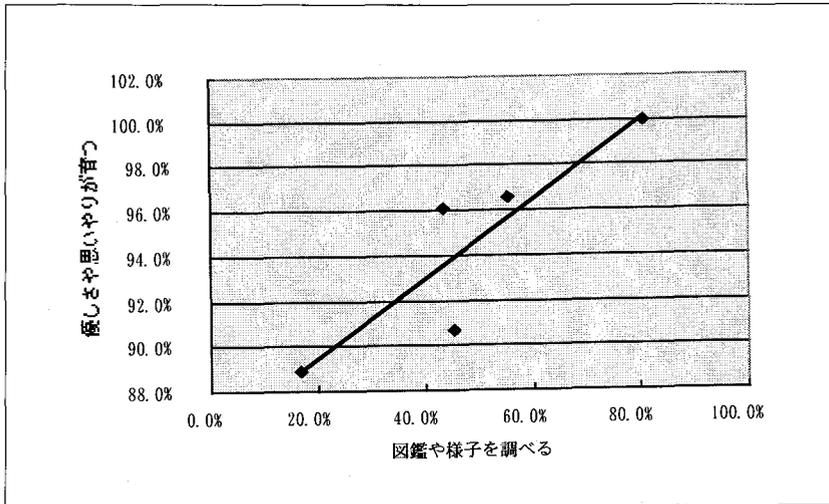
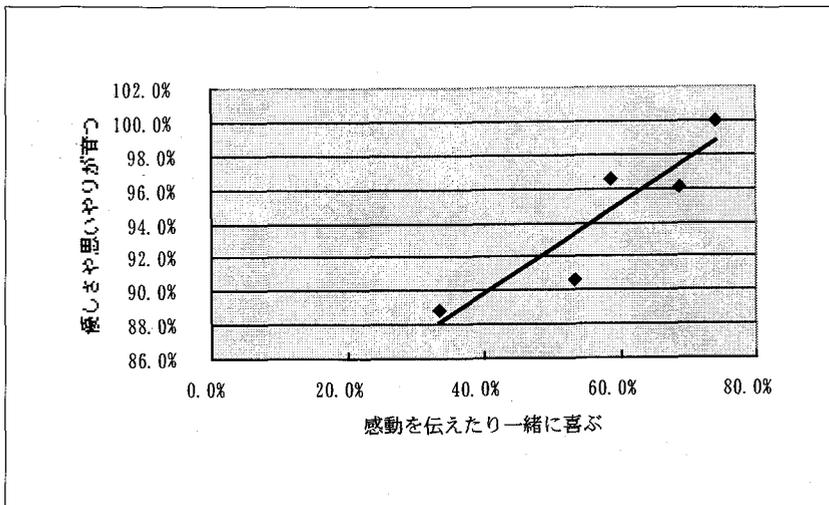


Fig. 13 優しさと触らせたり抱かせるとの相関 (r=0.37)

Fig. 14 優しさと図鑑や様子を調べるとの相関 ($r=0.89$)Fig. 15 優しさと感動を伝え一緒に喜ぶとの相関 ($r=0.91$)

上記の三つの Fig. は動物飼育活動によって「優しさや思いやりが育つ」ことがあきらかにされてきたが、特に「動物の子どもが生まれたときの対応」の中でどのような対応がどの程度相互的な関係にあるかを示したものである。これらの図から伺えるように、動物の子どもが生まれたとき、そうした生まれたばかりの子どもに、「触れさせたり、抱っこさせたりする」だけだとその相関係数は、0.37 とそれほど高いとは言えないことが示された。

しかし、「図鑑でいろいろな飼育の仕方を調べたり、じっくりと生まれた子どもの様子を調べたりすること」により、その相関は0.89 とかなり高いことが示された。とりわけ、職員と子どもが一緒になって「動物の子どもの誕生を感動し合ったり、一緒に喜び合ったりする」ことに

より、その相関は0.91とより高くなっていることが示された。

2) 「飼育している動物が死んだときの対応」について

以下の四つの図は動物飼育活動によって「優しさや思いやりが育つ」ことがあきらかにされてきたが、特に「動物の子どもが死んだときの対応」の中でどのような対応がどの程度相互的な関係にあるかを示したものである。

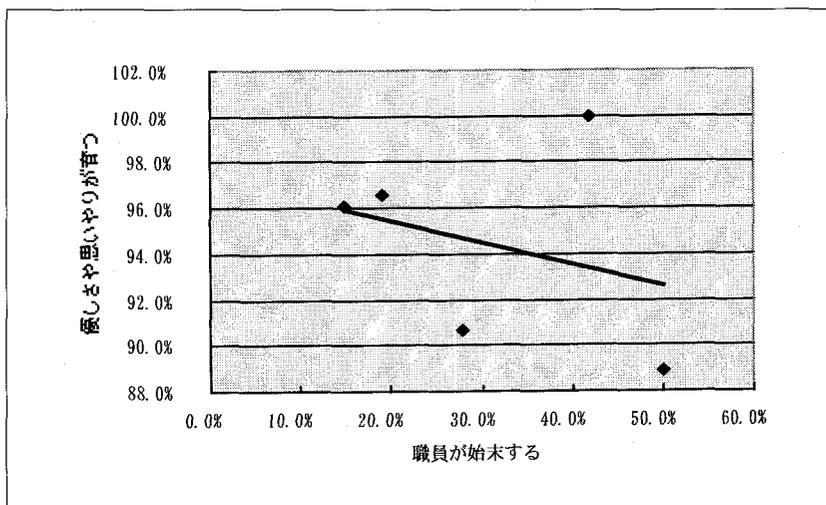


Fig. 16 優しさと職員が始末するとの相関 ($r = -0.31$)

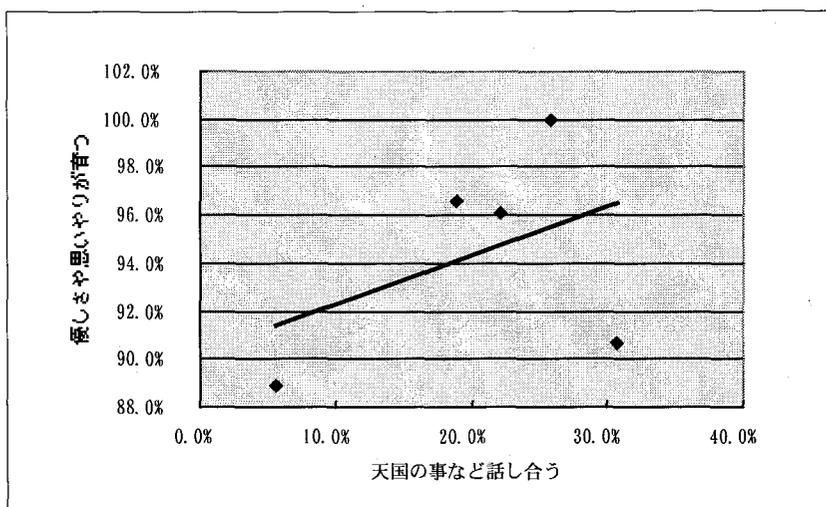
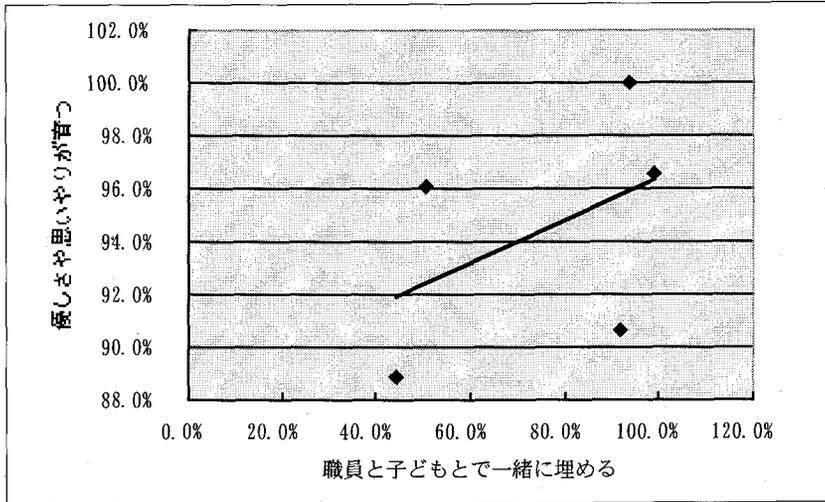
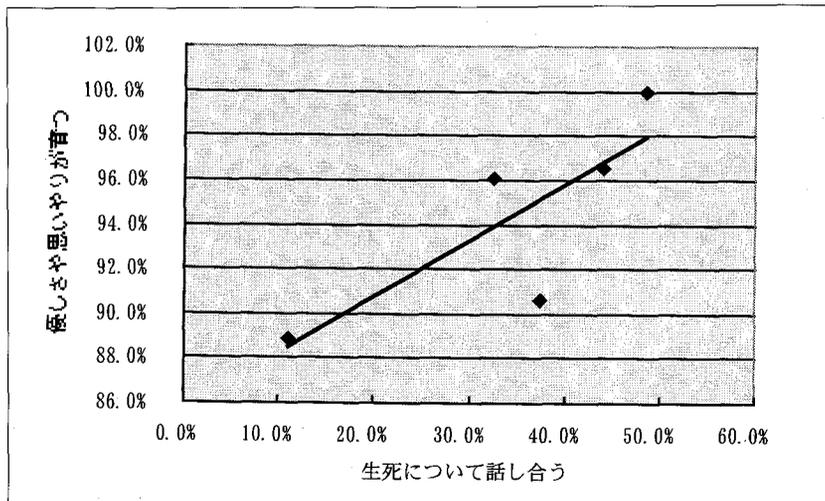


Fig. 17 優しさと天国の事等話し合うとの相関 ($r = 0.43$)

Fig. 18 優しさと職員と子どもと一緒にうめるとの相関 ($r=0.46$)Fig. 19 優しさと生死について話し合うとの相関 ($r=0.81$)

これらの図から伺えるように、動物の子どもが死んだとき、「職員が子どもの目に触れないようにそっと始末する」だけだとその相関係数は、 -0.31 と、むしろ逆相関であることが示された。特にも配慮すべきであることが伺える。

また、単に「天国のこと等を話し合ったりする」対応でも、その相関は 0.43 とそれほど高いとはいえないことが示された。さらに、「職員と子どもが一緒になって墓などつくり埋める」ことにより、その相関は 0.46 と多少は高くなっているものの、やはり、それ程高いとはいえないことも示された。

大切なことは、「死んだ時にこそ、子どもと一緒にして生死についてじっくり話し合った

り、そのうえで一緒に丁重に弔ったりする」対応が、重要であることが改めて示されている。ちなみに、その相関は0.81であった。

おわりに

「生、死」への対応としての上述のことからも伺えるように、全般的に「動物の子どもが生まれたとき」の対応を大切にしたりしているが、「飼育している動物が死んだとき」の対応の方を、より多くの園で重視していることが伺える。

幼児期に、こうした「動物が死んだときの対応」として大切なことは、「死んだ時にこそ、子どもと一緒に日々飼育してきた目の前のその動物の生死についてじっくり話し合い、そのうえで一緒に丁重に弔ったりする」といった対応が、生命の大切さや優しさを育み、「共生」を重視するその後の「心の成長・発達」にとって、とりわけ重要であるということを示唆している。

「天国のこと等を話し合ったりする」とか「職員と子どもと一緒に墓などつくって埋める」といった対応も一定程度有効ではある。しかし、特に配慮しなければならないことは、「職員が子どもの目に触れないようにそっと始末する」といった対応をさけることである。そうした対応は、時に逆効果をもたらしかねないということを肝に命じる必要がある。

また「動物の子どもが生まれたときの対応」も重要であることは明らかである。

特に、職員と子どもと一緒に「動物の子ども誕生を感動し合ったり、一緒に喜び合ったりする」ことが「優しさ」を育む上で最も大切な取り組みである。もちろん、「図鑑でいろいろな飼育の仕方を調べたり、じっくりと生まれた子どもの様子を調べたりすること」も大切であることは論を待たずである。しかし、単に「触れさせたり、抱っこさせたりする」だけだと、それほど「優しさ」を育むことには有効に作用するわけではないことにも留意する必要がある。

文 献

- 鎌田文聰, 1999, 保育園・幼稚園における「動植物の飼育、栽培活動」の岩手の現状—保育園・幼稚園における「動(植)物の飼育(栽培)活動」に関するアンケート調査—, 人と動物のこころ研究会, 杜陵プリント社.
- 鎌田文聰, 2000, 乳幼児と動植物飼育, 栽培活動—岩手の幼稚園・保育園の実態調査(続報2: 「有効性」を中心に)—, 人権感覚の発達とその指導, 岩手大学教育学部附属幼稚園, 岩手大学教育学部附属小学校, 岩手ワークショップ, 80~89.